
旅語り

ayu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅語り

【Nコード】

N6621S

【作者名】

ayu

【あらすじ】

小さなカケラを探すために、僕はひとり旅に出た。
僕の旅路の、最後の一年間のお話。

始まりの場所

眩しい。

太陽が地上へ注ぐ眩しさに何度か瞬き、僕は腕で日差しを遮った。夏の盛りだ。太陽は明るい。

色鮮やかに、華やかに咲いている背の高い向日葵が、真っ赤な太陽にじいつと熱い視線を送っている。太陽はきつと照れているのだ。だからあんなにも、目眩がしそうなほどキラリキラリと暑く眩しく輝いているのだろう。愛しい人に想いを寄せる女性のように、向日葵はいつまでもいつまでも太陽を見つめ続ける。

そう言えば、向日葵の花言葉は『私は貴方を見つめ続ける』だったか。確か『情熱』という意味も持っていたように思う。全く、前向きな花だ。太陽までの距離は果てしなく遠いというのに。なのにずっと、向日葵は諦めることなく思い人を見つめ、想い人のもとへ少しでも近付こうと背伸びする。なんて健気で一途な花なのだろう。

ああ実に、この季節は実に清々しい。

この燃えるような暑ささえなければ、本当に素晴らしい季節だと思う。鳥も虫も、どの季節に見るよりも生き生きとしているように見える。木漏れ日の下など、日差しの届かないところから眺めているだけならば、全く、これほど美しい季節はない。生命の美しさを感じるには、最も適した季節であるといえるだろう。

僕はほうつと深く息を吐いた。あまりの眩しさに、僕は肩から斜めに掛けた大きな鞆から鐔のついた耳当て帽を取り出し、きゅつと被った。影の中に顔を隠し、この耳当てがなければもう少し涼しいかもしれないと思った。

小粋なブーツはカッソとひとつ音を立て、大きな木の前で立ち止まる。

「やあ、久しぶりだね」

木の上には瑞々しく広がる葉の中に隠れて家がある。かつてぶら下がっていた縄梯子は、風が何かに煽られ落ちたのか、もう既に無くなっていた。

誰が住んでいる訳でもないけれど、僕はここに来る度にこうして声を掛けるのだ。住む人の居ないこの廃れた場所。木の上にあるくたびれた木造の家は、なんだか酷く、懐かしい。この場所へ来るたび、僕は酷く悲しくなる。

ここは僕の、始まりの場所だから。

泣き出しそうになるのを堪え、僕は地面に座り大きな木の幹にゆったりと背を預けた。旅に出たその日から、僕は泣くのを止めたから。泣かないと、泣いてはいけなないと、僕は自分に課したから。

ひんやりと優しい木の冷たさに、僕はそっと目を細めた。
旅から旅の根無し草。

そんな僕が、年に一度、この為だけに帰ってくるのだ。

「今年も、たくさんの国を回ったよ」

一晚を掛けてたくさんのお話をして、僕はまた旅に出る。
大きな鞆を斜めに掛けて、耳当て帽をきゅっと被って、小粋なブーツをカッソと言わせて、僕はまた一歩二歩と歩き出す。
旅から旅の根無し草。

この仕事が終わるまで、この旅が終わるまで、僕は一つ所には居られない。

おや、遠くに飛行機雲が。

ずうーっと真っ直ぐに、どこまでも限りなく、長く遠くに続く雲。突き抜けるような青空に、真白なそれはよく映える。

一体何処まで続くのかと聞いてみたくなるような、迷いなく伸びる、一本の長い長い白線。

これはまるで、僕の旅路のようだ。

そう思って、僕はほんの少しだけ微笑んだ。年に一度のささやかな休息は、これにてお仕舞い。

一歩一歩着実に、一つ一つ確実に進めていこう。

期限は、あと一年。

御伽の国

1

一枚、二枚と紅葉が落ちる。

ラディウスはそれを一枚拾い上げると、指先でくるりくるりと弄んだ。鮮やかな紅葉の色彩は、人々の目を、心を優しく楽しませてくれる。

くるり、くるりとしばらくの間そうやって遊んでいたが、やがて飽いたのかラディウスはぱっと手を離れた。紅葉はひらりふわりと弧を描き、音も無く、カサリとも言わずに地面に落ちた。強い風が吹いて、ラディウスは飛ばされそうになった耳当て帽を左手でそつと押えた。

そして耳当て帽をきゅつと被り直し、小粋なブーツをカツンと言わせて立ち止まる。

「……ナラティヴ。…変な名前」

国名を見て、呟いた。

もう一度、ふわりと風が吹いた。

「少しが楽しませてよね、物語」
ナラティヴ

別に期待はしていないけれど、とラディウスは舞台上の役者のように呟いた。ひらりひらりと、紅葉が落ちた。

カサリと、静かに泣きながら。

・

ナラティヴと言う国——僕は“御伽の国”と呼んでいたんだけど——あの国はなかなか楽しかったよ。正直なところ、あんまり期待はしていなかったんだけどね。でもナラティヴではアレも一つ見つかったし、アタリだったな。

ああ、それでね、僕があのかの国のことを“御伽の国”と呼んでいる理由なんだけど、うーん……、なんて言えば良いのかなあ。なんかね、童話的なんだよ。建物とか、景色とか、空気とか、そういうのがまるで童話の世界から抜け出てきたような感じでさ。もしかして物語の世界にでも迷い込んでしまったのだろうか、って錯覚しそうになるんだ。その影から小人か妖精でも出てきそうだな、なんて思ってしまうくらいにね。どうしてかな、あのかはどこか現実味が無かったんだよ。どこが、とは言えないんだけど。ええと、あの感じは…希薄、と言うのかな。はつきりと存在していないような感じだった。例えるなら、砂漠で見る蜃気楼のような…。

あのかはまるで、幻のようなんだ。

ほら、良くあるじゃないか。ありがちな古いホラー小説とか、幽霊や妖精なんかの出てくるような小説でさ。

とある小さな村の宿屋に泊まった次の日の朝、目を覚ますと地面に寝ていて村自体がすっかり跡形も無くなっていた、なんて話がさ。もちろんそんな冗談みたいなことは無かったんだけど、なんだかそんな雰囲気だったんだよ。

ああ、そうだ。そこでね、僕は“赤ずきん”に出会ったんだ。

すらりと背が高く、目鼻立ちのはっきりした凄く綺麗な子だったんだけど、妙に婀娜っぽい子でね。白いレースで縁取りされた真っ赤なずきんが、なんだか酷く、不釣り合いだった。

2

人が居ない。

誰一人として、外を歩いている人が居なかった。人の気配すらないというのが、何とも不気味だ。カラスが一羽、気怠げに鳴いて飛び立った。

宿屋の場所を聞きたいのに、これじゃあ聞きようが無いじゃないか。困ったな、とラディウスは呟いて、がしがしと乱暴に頭を掻い

た。耳当て帽が、少しずれた。

直しもせずに、ラディウスはひとつ溜め息を吐く。ひょいと、近くにあった家の塀の中を覗いてみた。庭木の手入れも花壇の花の手入れもきつちりとなされている。街自体もとても綺麗だ。

廃れてしまっている訳ではなさそうだが、この閑散とした有様は一体どうしたのだろうか。子供のいないしんと静まり返っている公園に入り、ラディウスはベンチに腰を降ろした。

「——キレイな髪ね」

唐突に後ろから聞こえてきた声に、ラディウスは驚いて振り返り、立ち上がった。

「とつてもキレイ。お日様みたいな金色ね。触つても良い？」

そこに居たのは真っ赤なずきを被った女の子。年の頃は、十七歳か十八歳くらいだろう。丈の短いスカートから、すらりと長い足が伸びている。少女は大人びた笑みを浮かべて、耳当て帽からわずかに零れるラディウスの金髪にそつと手を伸ばした。

目鼻立ちのはつきりとした綺麗な女の子だったが、その妙な婀娜つぽさゆえか、白いレースで縁取りされた赤いずきが、なんだか酷く、不釣り合いだった。

「…君は？」

前髪を撫でてくる手を払いもせずに、ラディウスは問うた。少女は眉をひそめ、わずかに唇を尖らした。

「んー…、人には“レッド・キャット”なんて名前で呼ばれたりしてるけど。でもあたし、その呼び名はあんまり好きじゃないのよね。だって、“赤い猫”だなんて気持ち悪いでしょ？」

ラディウスは苦笑して小さく頷いた。

確かに真っ赤な猫なんかが居たらなかなか気持ち悪いかもしれない。そんなの、安っぽいホラー映画でも出て来やしない。

「だから好きなように呼んでくれて構わないわよ。あなたは？」

真つ赤なずきんが、酷く不釣合いだった。似合わないのではない。良く似合っていると言っても良いくらいだ。ただ、違和感があった。ただ、不釣合いだった。

「僕はラディウス。…ところで、どうしてここには誰も居ないのかな？庭木の手入れとかはちゃんとされているようだし、誰もいないって訳じゃないだろ？もしかして、戒厳令でも出てるの？」

「まさか。そんな物騒な場所じゃあないわよ、ここは。出ても精々スリくらいなものだもん。今はね、お昼寝の時間なの。この国では、一時から二時までの一時間、お昼寝をする事が義務付けられているから。法律でそう決まっているの。…なんて、この国の王様がね、昼寝の時間が欲しいって子供みたいに駄々こねて、無理矢理この法律を作ったのよ。笑っちゃうでしょ？」

ラディウスは懐中時計を取り出して時間を確かめると、ふうんと呟いた。時計は一、分針は六を指している。じゃあ後三十分は誰も出てこないんだね、とラディウスは少女に視線を向けた。

「君はどうして眠らないの？赤ずきん」

赤ずきんか。それ良いねえ、と少女は青い目を細めて呟いた。

「皆の眠っている時間があたしの稼ぎ時なのサ」

二カつと懐っこく笑うと、ラディウスに背を向けてまるで猫のような軽やかさで駆けていった。

ぴよこんと身軽く塀の上に飛び乗ると、赤ずきんはヒュウと一口笛を吹いた。するとどこからか消炭色の猫が現れ赤ずきんの後を追った。

「チエリオ（ごきげんよう）！」

赤ずきんがそう叫んだのと猫がにゃあと鳴いたのはほぼ同時に。すぐに、一人と一匹の姿は見えなくなった。

「——あれ？」

取れてしまったボタンの代わりに鞆に付けていた銀色のブローチが無くなっていた。まあ、紛い物の安物だったから別にどうってことないけれど。

「…気に入ってたんだけどな」

瞳にファウンテン・ブルーの硝子玉が詰め込まれた、銀色の鳥のブローチ。何の鳥なのかは知らないけれど、愛嬌があって気に入っていた。

…それにしても、彼女は どうして懐中時計を狙わなかったのだろうか。あんな誰が見ても安物と分かるような物よりも、確実にこっちの方が値打ちがあるのに。

悪戯っ子のような、赤ずきんの淡いブルーの目を思いながら、ラディウスはひとつ息を吐いた。

「でもまあ、あの子にはぴったりか」

瞳の色、同じだったし。

心の中でそう付け足して、ラディウスはわずかに口角を上げた。猫を連れた赤ずきん。

奪い去るは、鳥のブローチ。

・

盗られたのがアレや財布じゃなくて良かったよ、全く。『出るのは精々スリくらいだ』なんてまるで他人事みたいに言うもんだから、僕もすっかり騙されてしまったよ。まあ、大した被害じゃないから別にどうってこと無いんだけどね。

それから二時になって、町の人々がちらほら活動をし始めてから安い宿を取って、僕はアレを探しに行った。…いや、正確には探しに行こうとした、かな。なんとね、僕が泊まった宿屋の主人がアレを持っていたんだよ。とても大切に保管してくれていてね、それには本当に驚いたなあ。

その主人はすごく気さくな人でね、訳を話したら快く譲ってくれたんだ。まあ、その代わりに晩酌に付き合ってくれて言われて、しこたま飲まされてしまったんだけどね。僕はそんなにお酒に強い方じゃないって何度も言ってるのに、ほら飲めそら飲めってどんだん

勧めてくるんだ。あれにはちょっと参ったなあ。

その人、バークさんって言うんだけど、大きくて、まるで熊みたいな人だった。背がとても高くって、もしかしたら二メートルくらいあったかもしれないな。とにかく、縦にも横にも大きな人だった。たまに敬語が抜けるところが馴染み易くて、表情のころころ変わる面白い人だったな。

壁にバークさんと綺麗な女の人のとても幸せそうな写真がかかっていたから、奥さんですか？美しい人ですね、って言ったんだけど、最近病気で亡くなってしまったんだって。悪いこと聞いちゃったな。

3

「あれ？旅人さん、鞆のボタン取れちゃったんですか？」

宿の主人にそう呼びとめられ、ラディウスはわずかに苦笑した。

「ええ、もう随分前に。その代わりにブローチを付けていたんですけど、それもさっきスられてしまって」

ああ、そういうことかと主人は頷いた。どこか楽しげで、お前もか、というような訳知り顔。

「ご存知なんですか？」

「ああ、この辺じゃあ有名ですよ」

クスクスと笑って、主人は続ける。

「“レッド・キャット”、でしょう？いやあ、一度で良いから顔拝んでみたいもんだよ。噂じゃあ、とんでもない美少女だって振れ込みですからね。」

『チエリオ！』って威勢のいい声が聞こえて赤い服が翻ったと思ったら、もうスられてる。だーれも顔見たこと無いんです。全く、猫みたいな奴ですよアイツは」

昼寝の時間だって油断は出来ませんよ、と主人は悪戯っぽく笑む。

「起きたら金品なくなつて、テーブルの上にやあ『チェリオ』って書かれたキレイな花柄の便箋が置いてあるんだ。まあ金持ちの家しか狙わねえから別に良いんですけどね」

ウチとは縁のない泥棒サンだ、と主人はからから笑いながら言った。ラディウスはときよんとして主人を見た。

「見ましたよ？顔。声掛けられました」

それに、盗られたのは安物のブローチだ。

そんなに価値のあるものではない。また、ラディウス自身、そんなに金を持っていそうな身なりをしている訳ではない。いつも清潔にはいるが、むしろ質素と言っても良いくらいの身なりだ。光物を身に付けているわけでもない。どう頑張っても金持ちには見えないだろう。

「へえー、そりゃあ珍しいこともあるもんですね。それで、どんな娘だった？どんなことを話したんですか？」

好奇心に薄茶色の瞳をきらきらと輝かせて、熊のような巨体をラディウスにぐいと近づける。ラディウスは思わず二歩ほど後ずさりした。

「まあ、そんな大したことは話してませんよ。ただ、髪を触っても良いかと言われただけです」

言いながら、耳当て帽をきゅっと被った。つま先で床をコンコンと叩いて、ずり落ちそうになった鞆を肩に掛け直す。

「へえ、そう言えば旅人さん、綺麗な髪をしてるもんなあ。太陽でも被ってるみたいだ。それより、お出かけですか？今日は旅人さん以外にお客が居ないから、案内でもしましょうか？」

「有り難う御座います」

それじゃあ、お言葉に甘えて、とラディウスは鞆の中に手を突っ込んだ。

「実は、搜しているものがあるんですよ。……もう少しで、完成するんです」

ラディウスはブローチの無くなった鞆から真紅の玉を取り出した。

それはまるで、ガーネットのような深い赤。良く見ると、わずかに欠けている部分がある。

それを見ると、宿の主人はんん？と、目を細めて首を傾げ、ちよつと待つてると言うように手で示して早足にどこかへ駆けていった。

「…どうしたんだろう」

しばらくすると、小さな宝石箱のような物を小脇に抱えて熊のような巨体がのっそりと帰ってきた。

「なあ、旅人さん。もしかして、その旅人さんの捜し物つてのは、これのことじゃないですか？」

宝石箱の中から、太い指で何か赤い欠片を摘み上げると、主人はラディウスの鼻先にそれを突き出した。

「……それは……」

「何年か前に、うちのかみさんがどっかから拾ってきたんだ。良いもん見つけたー、って言うてな。そうか、これ、旅人さんのだったのかあ。ああ、そのの窪んでいるところ、ちょうど嵌りそうですね」

ラディウスはふと、壁にかけられた写真に目をやった。明るい栗色の髪をしたとても綺麗な女の人と、熊のような主人が二人で並んでいるとても幸せそうな写真。見ているだけでこっちまで幸せになれそうな写真。普通の人ならば、それを見るだけで自然と笑みが零れてくることだろう。そう、何も知らない普通の人ならば。

けれど、ラディウスは知っていた。これを所持していたということの意味を。これを所持してしまったということの不運を。ラディウスは知っていた。目を細め、ラディウスは無理矢理に笑顔を作った。

まだ間に合いますようにと祈りながら。

僕は泣かないと決めたんだと自分に言い聞かせながら。

「奥さん……。あの人はですか？すごく、きれいな人ですね」

「ああ、美人だろう？俺にはもったいないくらい器量良しだ。……」

ま、先月死んじまったんだけどな。風邪をこじらしたと思ったら、そのまま逝っちまった」

「あ…、済みません」

…間に合わなかったか。

分かつてはいたけれど、実際に聞かされると胸が痛い。

ラディウスは心からの謝罪を述べる。辛いことを思い出させてしまつて申し訳ない、という理由ではなく、別の理由で。

写真の中で微笑む女性を愛しそうに見上げながら、気にしなさんなと主人は豪快に笑った。その横顔が凄く優しく、穏やかで、ラディウスは妙に悲しくなった。

「あいつとの日々は、本当に楽しかった。掛替えのない、幸せな時間を過ごせた。たとえ一緒に入れた時間が一週間だけだったとしても、俺は悔やんだりなんかしなかったと思う。そのくらい、俺達は充実した毎日を送ってたんだ。アンタが気にするようなことじゃないさ。まあ確かに、少し寂しいなとは思うけどな」

何もかも全部、僕の所為なのに。この人は、なんて優しい…。

ごめんなさい、とラディウスは心中で呟く。

「それで、これは一体何なんだ？」

主人は赤い欠片を手の平の上で転がしながら、ラディウスにそう問う。ラディウスは少し困ったように口元を歪めた。ややあって、ラディウスは呟く。

せめて、事実を語ろうと。

「…“ココロのカケラ”」

ラディウスは、静かに続ける。

「僕の友人の、…とても大切な人の“ココロのカケラ”です。…僕が、壊してしまったから。だからこうやって、集めているんです」

とても孤独な人だったから、ぬくもりを求めている。

とても不器用な人だったから、そのぬくもりを自ら壊してしまう。とても孤独な人だったから、暖かい人の元へと散っていった。

とても不器用な人だったから、その人を自ら壊していった。

「んー…、なんだか良く分かんねえけど…まあ、良いや。やるよ。俺が持っけていても仕方が無いからな」

だから、あなたの奥さんは亡くなってしまったんです。

その言葉を飲み込んで、ラディウスは二人の写真を見上げた。幸せそうな二人の笑顔が、見ていて辛かった。

「…旅人さん、名前は？」

「…ラディウスです」

無理矢理に口角を上げ、笑顔を作った。

「ラディウス…。ラディか。俺はバルカローラってんだ。女みたいで柄じゃないから、皆にはバークって呼んでもらってる」

そう言って、バルカローラはラディウスの手には赤い欠片を握らせた。落とさないように、しっかりと。バルカローラの手は、とても大きく暖かった。

ラディウスは有り難うと呟くと、紅い玉の欠けた部分に“ココロのカケラ”をかちりと詰め込んだ。その継ぎ目を指でそつとなぞると、それは脈打つように二、三度光ってひとつになった。

バルカローラは驚いたように目を見開いたが、すぐ優しく目に細めた。

「ラディの事情は俺には良く分かんねえけど、あんまり落ち込むなよ。これはアンタにくれてやるからよ」

わしゃわしゃと、小さな子供にするようにラディウスの頭を帽子の上から撫でまわし、ニツと笑った。

「その代わりと言っちゃあ何だが、今夜、晩酌に付き合ってくれねえか？」

そうすりゃあ、後になってからやっぱり返してくれ、なんて無粋なことは言わねえからよ」

ごめんね、僕は君との約束を破ってしまった。

君の“ココロ”が、誰も傷つけることの無いようにするって約束していたのに…。誰も傷付けたくはないと、君はそう願っていたのに間に合わなかった。もう少し早ければ、最悪の事態にはならなかったかもしれないのに…。人の命は、なんて、重い。あの人のために、一体どれほどの人が涙を流しただろうか…。

本当に、ごめんね。僕がほんの少し遅れてしまったばかりに、少なくとも二人の人を傷つけてしまった。そしてきつともっと、たくさんの人を傷つけた。君が一番、恐れていたことだったのに…。優しい君が、絶対に望まないことだったのに…。ここまで来て、ついにあの約束を破ってしまった。

ああ、悲しいけれど、もう時が来てしまったみたいだ。“時”はもう僕を待つてはくれない。君の“ココロのカケラ”はまた誰かを傷つけることになってしまう…。悲しいけれど、きつと…。

だけどほら、見てよ。もう少しだ。もう二つか三つ集めれば、完成するんだ。もう少しで終わる。これが完成すれば、ようやく、君に会うことが出来るよ。だから…。もう少しだから、待っていて…。

氷の国

1

びゅうと、木枯らしが吹いた。

ちらりと何か、白い物が頬を冷たく掠めていったような気がしたが、それはすぐに見えなくなった。

ラディウスはわずかに濡れた頬を手の甲で撫で、前を見た。カッソコッソと小粋なブーツが石畳を鳴らす。

『今お前が目を覚ましたと同時に、ディストレスのココロは砕け、飛び散った』

ラディウスは魔女の言葉を反芻し、くつと視線を上げた。

空は、これでもかと苛々するほど青かった。

「ディストレス」

白い息を吐き、ラディウスは呟く。

「もっ少しだから、待っていて」

どうかかわずかでも、この祈りが届きますように。

この思いが伝わりますように。

・

ほんの一時だったんだけどね、僕に旅の仲間が出来たんだ。

ほら、あの時の“レッド・キャット”。僕のブローチを盗って行った、あの赤ずきんだよ。ナラティヴが出る時に走ってきて、いきなり腕をつかまれてね、一緒に連れて行って欲しいって言ってきたんだ。ずっと一人で旅をしていたから、なんだか楽しかったな。隣に

話し相手のいる旅って初めてだったから。ああいうのもたまには良いものだね。別れの時は、少し寂しかったけれど。

それで、その赤ずきさんだけど、なんか急に家に帰りたくなっただって。家出同然で家を出て、もう絶対に帰るもんかと思っていたらしいんだけど、僕のこの髪を見て弟さんに逢いたくなったらしいよ。なんでも、彼女の弟さんが僕のと同じような明るい金色の髪だったらしくて、懐かしくなったんだって。

あ、そうそう。あの鳥のブローチも返してもらったんだ。銀色の、青い瞳の奴だよ。せつかくだからもう泥棒稼業から足を洗うんだって言うてさ。でもまあ、そのままあげちゃったんだけどね。

2

「ねえねえねえ、本当に？これ、ほんとうにあたしが貰っても良いの？このブローチ、大切な物なんじゃないの？」

真っ赤なずきんを被った“レッド・キャット”——本名をアリスと言うらしい——は、ちょこまかとラディウスにまわりつく。その足元には、消炭色の猫がちょこちょこと付いて回っていた。少し歩きにくいななどと思いつつも、ラディウスはアリスに返事をする。

「うん、貰ってよ。足を洗えたお祝い。安物で悪いけどね」

アリスはにつこりとして、ブローチを胸元に付けた。

「有り難う、うれしい！！」

「どう致しまして」

ラディウスもにつこりと笑みを返した。アリスはちょこちょこ足元を歩いていた消炭色の猫を抱き上げ、その額にキスをした。うにゃあと一つ、相槌を打つように猫が鳴いた。本当に返事をしていくのならすごいよな、とラディウスはそれを眺める。

「ねえチェス、チェシー？聞いた？これ、あたしにくれるんだって！どう？素敵じゃない？」

消炭色の猫は、名をチェシャと言らしい。

しかし、アリスがチェシャと呼ぶことはほとんど無く、大抵は“チェス”や“チェシー”といった愛称で呼んでいた。愛称は親愛の証だから、と。チェシーはペットじゃなくてお友達なの。

アリスは良くそう言っていた。

「『ここから飛び降りたら僕は鳥になれるだろうか』」

「…アリス？」

「弟がね、良く言っていたの。空を飛びたい、って。屋根に登って下を見下ろして、両手を広げて、僕は鳥になりたい、って」

空を見上げ、懐かしむようにアリスは笑った。

「『鳥は自由だ。鳥のように飛び立ち、風に身を任せて生きることが出来ないだろうか』ってね」

「君の弟は詩人なんだね」

そうよ、と自慢げに頷いて、アリスは鳥のように両手を広げた。

チェシャはぴょんと身軽く地面に着地する。

「あの子はとても賢くて優しかったわ。それに、夢を持っていた！いつも、どんな時でも、笑顔を忘れなかった！」

弟のことを嬉々として語るアリスの姿がなんだか微笑ましくて、ラディウスはわずかに目を細めた。

「自慢の弟なの。もし本当に鳥になっていたとしたら、あの子はきつとこんな鳥になっていたと思うわ。綺麗な銀色で、日の光を体中に浴びて、自由に、世界を飛び回るの！瞳の色もね、この鳥と同じなのよ。とても綺麗な、湖の色をそのまま映したようなファウンテン・ブルー」

一つ息を吐いて、鳥のブローチに指先でそつと触れながらアリスは続ける。

「……ねえラディ、あたしね、本当に嬉しいの。…分かつてはいるのよ？普通だったら、ありがとうって言うてにつこりして、今度はあたしからも何かプレゼントするね、って、そのくらいで終わるものだって言うのはね。分かつてはいるの」

アリスは少し肩をすくめた。

「そんなことは無いと思うけど。でもまあ、自分で自分を抑える、
っていうのは多かれ少なかれ誰にでもあるよね」

「ああ。違うの違うの。そういうことじゃないのよ」

クスクスと楽しげに笑うアリスに、ラディウスはわずかに首を傾げた。その様子が可笑しかったのか、アリスはまたクスクスと笑い出す。

「あのね、あたし、こういうのって初めてなの。こうやって何かお祝いをしてもらったり、プレゼントを貰ったりっていうのは、初めてなの。だから嬉しくって。小さい時から、ずうーっと夢見てたの。誰か素敵な人が現れてね、誕生日とかの記念日なんかに、あたしのお祝いをしてくれるっていうのを。ラディのおかげで、夢が一つ叶ったわ」

どんなにちっぽけな物でも、あたしにとっては百万ドルの宝物になるの。

泣き出しそうな顔で微笑んで、アリスはそう呟いた。

その日の夜、二人は小さな宿屋に泊まった。部屋を分けようというラディウスの言葉に、アリスはお願いだから一つの部屋にしてくれと言ってきた。

「ねえ、お願い。あたし、一人じゃ恐くて眠られないのよ。誰かの気配があれば安心してうつらうつら出来るんだけど…。いつもならチェシヤと一緒に居てくれるんだけど、今日は何故かどっかに行っちゃったし、…。どこに行っちゃったのかしら」

「…でも」

口籠もるラディウスに、じゃあせめてあたしが寝つくまで傍で居て欲しいとアリスは言った。

「…分かったよ。だけど、アリスが寝ついたら部屋に戻るからね」
「うん」

ラディウスは安心したようにほっと息を吐いたアリスの頭をくし

やりと撫で、同じ部屋へと入って行った。広くは無いが、こざっぱりとした綺麗な部屋だ。部屋の隅々まで掃除が行き届いているし、真っ白なシーツには清潔感がある。

アリスは荷物を降ろすと、ぽふんとベッドに腰を降ろした。赤いずきんも脱ぎ、膝の上に置いた。ラディウスも耳当て帽を脱ぎ、ベッド脇に鞆を下ろす。

「ねえ、ラディウスはどうして旅をしているの？」

手近にあったクッションを抱くと、アリスは大きな青い目を不思議そうに細めてそう問うた。

「…あたしには、訳ありみたいに見えるんだけど。ただ単に旅が好きだからって訳じゃないでしょう？」

ラディウスはどうして分かっちゃうのかなあと、困ったように笑った。

「だって、凄く真剣なんだもの。わざとお気楽に振る舞ってるでしょ」

そういうのって結構分かるものなのよ、とアリスはラディウスを見た。

「…実は探し物をしていてね。何が何でも、どんな手を使ってでも、全部掻き集めなくちゃならないんだ。…一つでも、欠けちゃならないんだ」

アリスは訝しげに眉を顰めた。ぎしと、古びた椅子をわずかに軋ませてラディウスは腰を降ろした。そして鞆を引き寄せる。

「あたしで良かったら、協力するよ」

「早く帰りたいんじゃないの？」

くすりと笑って少し茶化すように言ってみた。アリスは肩を竦めて、何を搜しているの？とラディウスの言葉を無視して言う。ラディウスは頷き、鞆から“ココロのカケラ”を取り出した。

「これだよ。この、少し欠けているところがあるだろ？ここにぴったりと填まる欠片を搜しているんだ」

「……それ」

口許に指を当て、アリスは首を傾げた。

「…まさか、見覚えが？」

「…昔、おじいちゃんが持っていたような気がする」

「本当に!？」

「あの、…もう、亡くなっただ、けど…」

だんだんと、声が尻すばみになる。

「…そっか」

こくん、とアリスは頷いた。

「今度は、アリスのことを聞いても良いかな？」

「何？」

わずかに逡巡して、ラディウスは口を開いた。

「何をそんなに恐れているの？」

アリスは笑った。

屈託無く、声を上げてあははと笑った。けれど、その笑い声はだんだんと乾いた物となり、最後には沈黙が訪れた。

窓の外では、夜空に月が輝いていた。

「…夢をね、見るの」

「…え？」

「夢を見るの」

聞き返すラディウスを無視して、アリスは続ける。クッションに口元を埋めたままだからか、少しくぐもった声がする。

「…どうしてか良くは覚えてないんだけどね、あたし、多分悪い子だったんだと思うの。お母さんね、いつもあたしのこと怒ってた。たまに殴られたりもしたの。…あたしも、それに弟も…」

アリスは一体、誰に語り掛けているのだろうか。

そう考えてしまうほどに、アリスの瞳はぼんやりとしていた。どうしてだろう。ぼんやりと、『今』では無い何処かを見つめているように見える。

真っ直ぐに前を向いてはいるけれど、その視線は、何もない虚空に向いていた。ラディウスは思う。その青い瞳には、何が写っている

るのだろうか、と。

ラディウスは無言のまま、アリスを見つめた。

「おじいちゃんだけが、あたし達を庇ってくれたの。二人は何もしていないだろうって…。あたしは…あたし…ありすは…ね？いつもおじいちゃんの膝の上で、お話をしてもらっていたの」

口調が、急に幼くなる。

「…闇の深い夜こそ、ちゃんとしないといけないよ。闇には魔物が潜んでいるから」

ぐずぐず泣いていたなら、おっかない魔物にくわれちまうよ。

年老いた老人のような声色で、アリスはぽつりと呟いた。

「しっかりと前を見て、背筋をピンっと伸ばしてにこにこして笑ってりゃあ、魔物だって取って食おうって気にはならないだろうからね…。おじいちゃんはねえ、ありすたちにいつも、お話してくれたの…。それに、お守りもくれたの…」

アリスは目を擦り、ぬいぐるみを抱いて眠るまだ幼い少女のようにクッションを抱えたままベッドに横になった。うつらうつらと目を瞬かせる今のアリスに、あの婀娜っぽい少女は見えない。

ラディウスはアリスに布団を掛けてやり、その目元を優しく撫でた。

「……ありす、まだ眠たくないよ」

「…もう遅い。寝る時間だよ」

時刻は、午後八時。十七、八の少女が眠るにはまだ早い。けれど寝かせてあげようと、ラディウスは部屋の電気を消し、呟いた。

「お休み、アリス」

うん、と分かるか分からないくらいの頼りない返事をする、アリスは静かに目を閉じた。

つうと一筋、涙が零れる。

「……ごめんね。…お姉ちゃんだけ…逃げ出したりして……」

ラディウスはアリスの手を取り、ベッドの脇に座った。そして共に、ゆっくりと目を閉じた。

アリスの国は、乾いた木枯らしが威圧的に吹き付けてきて、とても寒かった。そして何だか、寂れたような国だった。まるで氷で閉ざされてしまっているみたいで、入りにくかったな。

何年ぶりになるの？って聞いたたら、もう三年になるって言った。アリスは何でも無い、って平気そうな顔をしていたけど、辛そうだったな。あの鳥のブローチを握り締めて、ずーっと振るえてた。

…本人は寒さのせいだって言っていたけれど、それでもやっぱり、強がっているようだった。

それで、あんまり辛そうだったから無理して逢いに行くこと無いんじゃないかって言ったんだ。だけどね、アリスは凄く気丈だった。あたしは弟に逢いたい、逢わなきゃいけない。どうしても会って謝らないといけないんだ、って。真っ直ぐに前を向いて、しゃんと背筋を伸ばして、進んで行くんだ。まるで魔物たちを威圧するように、真っ直ぐに。

…祈りを捧げないといけないんだ、ってアリスは言ってた。

真っ赤なずきを被ったその横顔がすごく綺麗で、僕は思わず見惚れていた。あの時、彼女の婀娜っぱさはすっかり消えて無くなっていた。

3

ぴたりと、アリスは足を止めてラディウスに向き直った。

「ラディ、ここでお別れしよう。申し訳無いけれど、貴方をあたしの家に連れて行くわけには行かないから」

そう言つて、アリスはわずかに口角を上げた。小さく肩をすくめて見せるその姿は、何故だか懇願しているように見えた。

お願いだから、とアリスは無言のまま訴え掛ける。

「…分かった。それじゃあ、ここでお別れだね。——さようなら、

アリス」

「…さようなら」

アリスの淡いブルーの瞳は、わずかに潤んでいた。

「…ラディ、目を瞑ってくれる？」

言われた通りに目を瞑り、ラディウスは思った。

もしかしたら、アリスは家族に逢うことをあまり期待していないのかもしれないな、と。

「——チェリオ!!」

その声に、ラディウスははっとして目を開いた。遠くの方に、はたはたと翻る鮮やかな赤が見えた。色あせた灰色の町並みに映える、真っ赤なずきん。

その赤は悲しくなるくらい綺麗で、鮮やかで…。

「——あれ？」

何も入っていなかったはずのポケットがわずかに膨らんでいることに気が付いた。中には、ぐしゃぐしゃに丸められた紙切れと、小さな巾着袋。

『ありがとう』

紙を開くと、たった一言、そう書かれていた。巾着袋を開けてみると、キラリと、何か赤く光る物が顔を出した。

ラディウスはそれを手に取り、俯いた。

「…君はもう、三年間もコレに振り回されていたんだね」

ごめんね、と呟いて、ラディウスは灰色にくすんだ空を見上げる。まっさらな青空が、酷く恋しかった。夕暮れの紅が、懐かしかった。

にゃあ。

後ろを見ると、消炭色の猫がいた。猫はじっと、僕を見つめている。

「…チェシヤ。お前、一緒に行っただんじゃなかったのか？」

にゃあ。

もう一度鳴いて、チエシヤはふいと空を見上げた。
その姿はまるで、夜更けを待っているように見えた。暗闇の優しさを求めているように見えた。

「心配しているの？」

猫は、応えなかった。

「…そうだよな」

ラディウスはチエシヤの横に腰を降ろし、そつと目を細める。

チエシヤの瞳も、鮮やかな青なのだと気が着いた。消炭色の毛並みを静かに撫でながら、ラディウスは再び空を見上げた。

「君はペットじゃなくて、友達なんだもんね」

アリスとの一時の旅は、まるで夢のようだった。

・

君との約束を守ることは、本当に難しい。今までの人たちは、どうにか傷付いてしまう前にココロのカケラを譲ってもらうことが出来た。

カケラを集めるため、たくさんの交渉をした。泥棒のような真似もした。だけど、もうダメみたいだ。もう時は過ぎてしまった。

君の“ココロのカケラ”は、必ず誰か人の手へと渡る。そしていつも、手にした人を幸せをもたらす。手にした人の望む幸せを、恵んでいく。けれどある時からはその幸せを静かに穏やかに、けれど確実に奪っていく。

…あの時から、もう四年と半年が過ぎた。あの時十二歳だった僕は、もう十七歳になるうとしている。

あと一つ。あと一つ見つけ出すことが出来れば、僕は君に会うことが出来るんだ。ディストレス、早く、君に逢いたいよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6621s/>

旅語り

2011年5月31日12時07分発行